

しま じり
島尻



島尻は、「パントウの里」として知られ、祖神祭とパントウに代表される集落です。1950(昭和25)年頃までは米どころとして有名で、わざわざ遠くから「島尻米」を買い求めに来る人で賑わいをみせていました。その後、収入の良いきび栽培へ転換し、現在は畜産業と果樹栽培も盛んです。

集落の始まりは分かっていませんが、『宮古八重山両島絵図帳(1647)』に「嶋尻」の名前があることから、その頃にはすでに村があったと考えられています。

しま じり もと しま
市指定史跡

1978(昭和53)年2月7日指定

しま じり もと しま

島尻元島とシナカガー



島尻元島は、集落の発祥地と伝えられています。最高神を祀るムトウがあり、パントウの面が収められています。現在の集落北方の海に突き出した小高い丘に位置し、出入口付近には戦前まで石積みのアーチ門がありました。いまは全世帯が離れ、屋敷跡だけが残されています。

また、元島から南へ200mほど離れた畑の中に、住民が使用した井戸と考えられているシナカガーがあります。



しま じり
島尻コース

宮古島のパーントゥしまじり(島尻)

ユネスコ無形文化遺産

2018(平成30)年11月29日登録

来訪神：仮面・仮装の神々



島尻のパーントゥ祭祀は、旧暦9月初めに行われています。パーントゥとは異様な形相をした仮面神のことで、面をつけたパーントゥ3体が、全身に巻きつけた蔓草に泥をまとい、集落を練り歩きながら新築の家や出会った人々に泥を塗り付けて厄払いをします。

仮面神が現れる祭祀は上野野原にもあり、2018(平成30)年に、あわせてユネスコ無形文化遺産に登録されました。

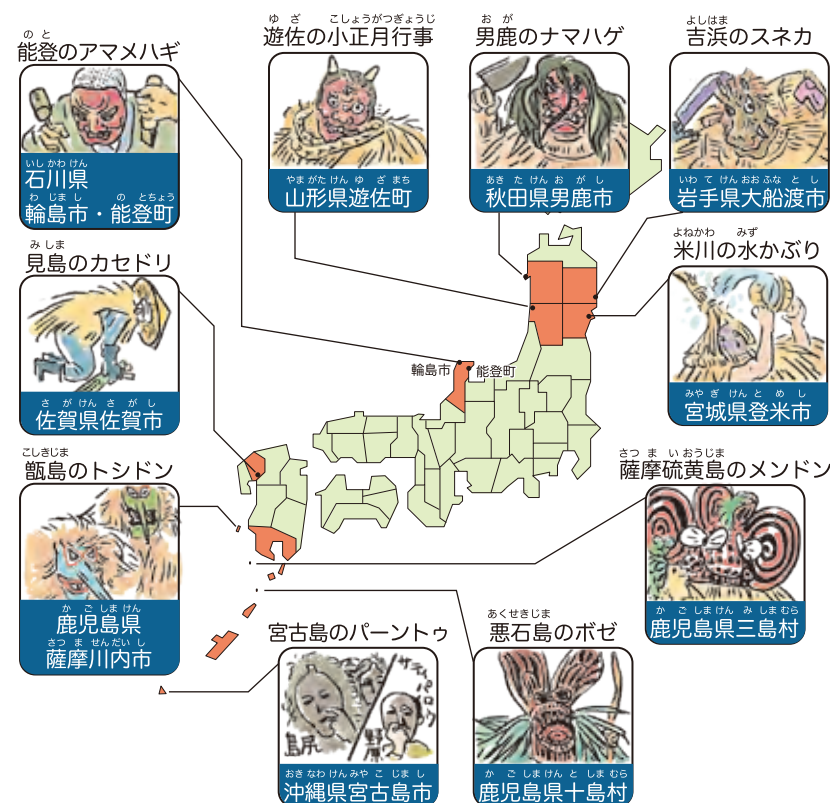


パーントゥとともに登録された来訪神たち

東北から沖縄までの8県10種の行事が、「来訪神：仮面・仮装の神々」として、2018年にユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の無形文化遺産に登録されました。

来訪神とは、決まった時期に人々の世界に来訪し、実り豊かな作物や幸福をもたらす神のこと

され、日本各地で伝承されてきました。仮面をつけたり仮装をしたりなど、異形の姿で人間とは異なる存在だということを表現しています。来訪神の信仰は世界各地で広く行われており、日本でも盛んです。





昔、クバマという浜に
クバの葉で包まれた面が
流れついた。
集落に富をもたらすものとして
大切にされた。
戦時中に焼失し、今は複製。
後にフア(子)パーントウが加わる

どういう意味?
パーントウ・プナハ
果様な形相
の仮面神、
悪霊を
連れ去る者
のこと
「大きな庭」
という意味
↓
里(集落)
の人が集まる
祈願を
行う場
↓
転じて
タマシ

親パーントウは
フツムトラに、
中と子は集落内の
個人宅に保管

パーントウ・プナハ前日に行われる
魔物よけの「スマツサリ」



集落の出入口には
道路の上に縄を張る

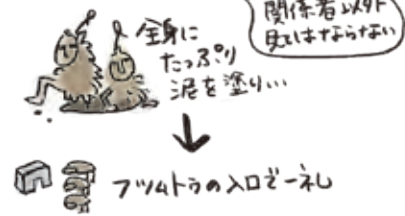
- パーントウの現れ方
- 「パーントウ・プナハ」は、年3回行わ
れる「サウ・プナハ」の1つ。
里=集落
1. サウ・プナハ: 健康祈願
(旧暦3月末~4月1日)
 2. ズ・コ・モー: 米の収穫を祈る
(旧暦5月または6月)
 3. パーントウ・プナハ: 厄払い
(旧暦9月)

パーントウ・プナハ (2日間)

昼 パーントウの体は巻く
「キャン」を集める

キャン
フ草の総称。
パーントウの使うキャンはシノキカズラ。
今はシノキカズラが少ないので
いろんなキャンを使っている。

夕 ンマリガでパーントウ誕生
16:00頃



全身に
たっすり
泥を塗り...

関係者以外
見はならない

フツムトラの入口でーネシ

各ムトラへ
ムトラの
ニゼ(神の宿る所)
にーれを
したあと
酒を振る
舞われる。

各ムトラへ
寄りながら
泥を
つけて回り、
厄を落とす
人も、家も、車も...!

20:00頃
ビダ(浜)で泥を
落とし、人間に戻る。



しま じり だん そう がい かい しょく だい 島尻断層崖と海食台



写真：安谷屋昭

宮古島の地層は、上部に水を通しやすい琉球石灰岩などからなる琉球層群が、下部に水を通しにくい泥岩や砂岩からなる島尻層群が堆積しています。島尻断層崖は、およそ650万年前に堆積した島尻層が高さ5～25m、長さ約400mに渡って地表に現れており、地殻変動でできた断層や褶曲も間近で観察できます。

また、遠浅の海底はその時代の泥岩層が続く、海食台となっています。



か せき シマジリクジラ化石



この化石は、1973(昭和48)年に始まった沖縄第四紀調査団により、島尻海岸の海食台の波打ち際で発見されました。今から約200～600万年前の化石とされます。ヒゲクジラ亜目ナガスクジラ科の仲間とされますが、詳細ははっきりせず、島尻海岸から発掘されたため、シマジリクジラと仮称しています。

化石は、宮古島市総合博物館に収蔵・展示されています。

宮古におけるクジラの化石は、この他に城辺地域で仲原化石が発見されています。

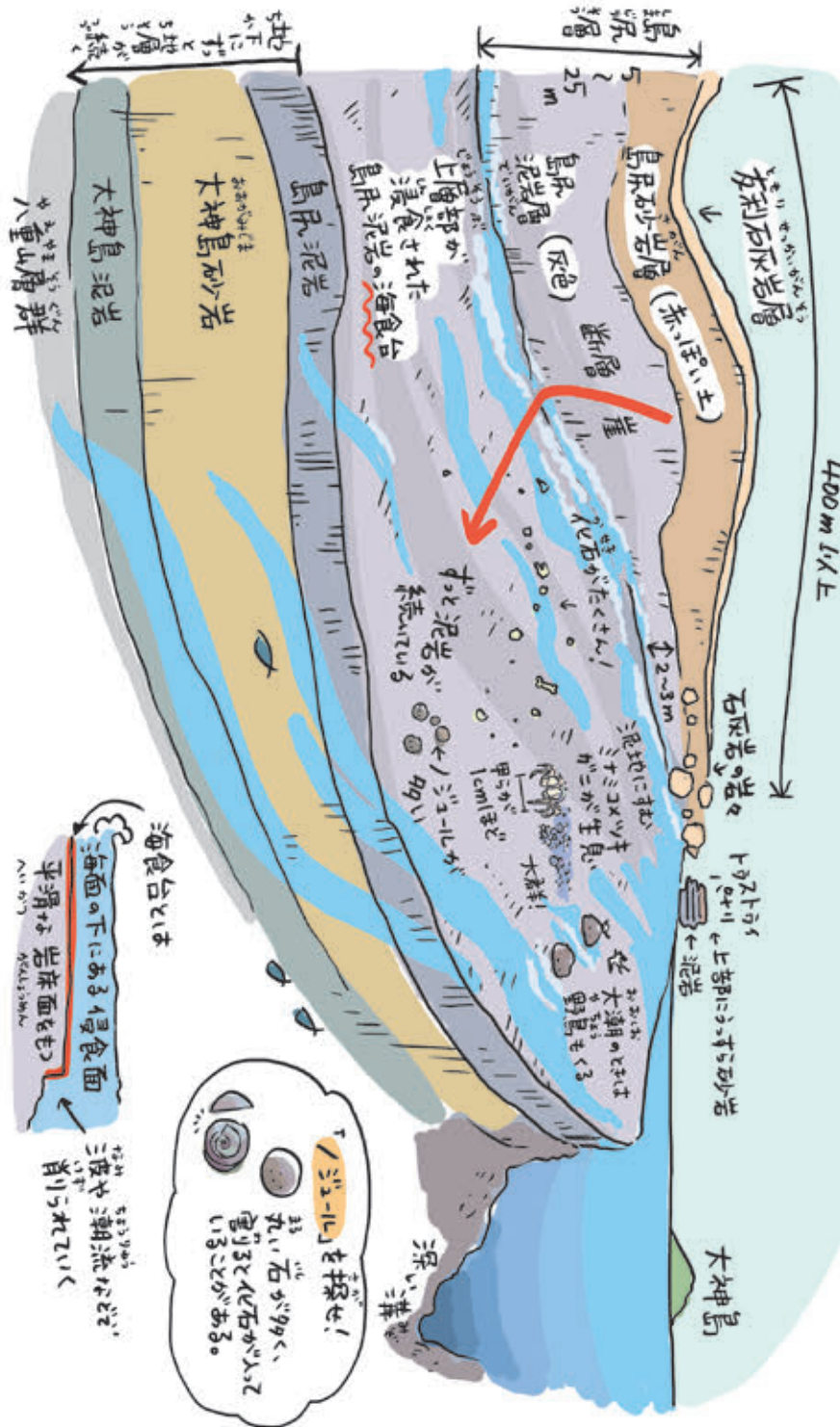
島尻のマンングローブ林



島尻のマンングローブ林は、奥行き約1 kmの入り江に発達し、宮古諸島の中で最大規模の群落で、「環境省日本の重要湿地500」にも選ばれています。ここには宮古を北限とするヒルギダマシを含め、2科4種が確認されています。河川のない宮古諸島で発達するマンングローブ林は植物地理学上とても重要で、海の森とも呼ばれる特殊な生態系は、様々な生き物のすみかになっています。



図解！ 島尻断層崖と海食台



大神コース

散策コース →

所要時間：徒歩約1時間
(約2km)

遠見台として明確な物はない。頂上の平坦な部分一帯を文化財指定している

先島諸島火番盛 大神遠見 P50

フディ(フデ岩)

東平安名崎
ながま 長間

大神島層を観察できる

標高74.7m

トランパ
目めよし

大神島の倉り世神とされる夫婦神が示られる

大御嶽

1980年海底送水開始。電気も同年

貯水タンク
カフカヌカー

ウブヤヌカー
(カー=井戸)

しよははい
水だった

ナカムトウカー

宮古が一番古い地層、「大神島層」の露出する崖。埋め立て後、草が茂り、崖のようすは分かりにくくなっている

ウブミーカヤマ

数多くの車云石がある

フタカーの水だけが飲めた。にじみ出る水をすくい取っていた。水の確保は本当に大変だった。

フタカー

公民館

大神小中学校跡

トウヌクティ

埋立地
多目的広場

カミカキス
亀

「カメが迷い込んで」出られなくなる」ほど深い浅瀬だった

昔の船着場だった浜



戦闘機の燃料タンク

雨水を貯めたり、宮古島で入れた水を運んだりした。

今も集落内に残る

2018年から環境美化のために任意の入島料を設定。

ウブシ

舟の目印になった大岩
リブシ

昔、土成辺の長間の浜に小屋を建て、泊まり込みで漁をした。今も長間に感謝する祭祀が行われている。

魚 ↔ 野菜
土産物と牛乳の交換

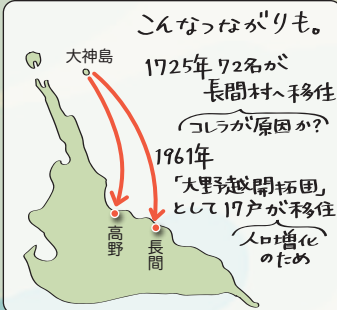
トウヌクティ
御嶽

長間

宮古島

提防の一部が壊れ、長間地区が遠征できる。遠く離れたところから拜むこと

こんなつながりも。
1725年72名が長間村へ移住
(コシラが原因か?)
1961年「大野越開拓団」として17戸が移住
(人口増化のため)



※島全体が聖地のため、散策道以外の敷地や山林に許可なく入ることは禁じられています。

大神島



大神島は島尻の北約4 kmに位置し、標高74mの山腹の南斜面に集落が形成されています。人口は1960(昭和35)年頃の245人がピークで、現在、20名前後が生活しています。この島では宮古島の一番古い地層を見ることができます。1977(昭和52)年には、カミカキスと呼ばれる現在の多目的広場で、ゾウ類の化石が発見されています。

いまでも秘祭である祖神祭が残されており、島の人でも立ち入れない所が多く存在し、島全域が神聖な場所です。

秘祭 祖神祭(ウヤガン・ウヤーン)

祖神祭は、大神、島尻、狩俣の3地域で行われる秘祭で、大神が起源とされています。大神と島尻は「ウヤガン」、狩俣は「ウヤーン」と呼んでいます。

この祭祀は、祖神を迎え入れ、集落に世(豊穰)が満ちるように祈願します。大神は旧暦6~10月、島尻と狩俣は旧暦10~12月の間に数回にわたって行われます。

祖神祭は夜通しで山籠もりなどが行われ、その間神女たちは一睡もせず、水と塩だけをとって神との関わりを続けるといいます。

秘祭のため、具体的な内容はほとんど知られていません。

かつては大神の祖神祭が終わると、終了の合図として遠見台からのろしが焚かれ、それを受けてから島尻と狩俣は祭日を決定しました。そして両集落ともに祭祀が終わると、終了の合図としてのろしを上げ、大神に伝えていたといえます。

島尻と狩俣では、2000年頃から後継者不足により祭祀が途絶えています。大神では現在もおこなわれています。

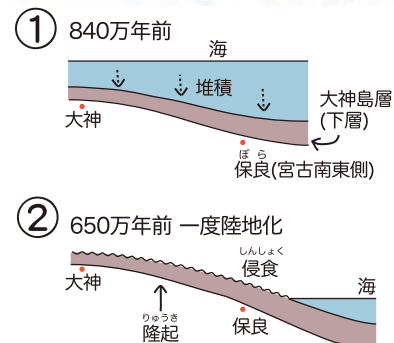
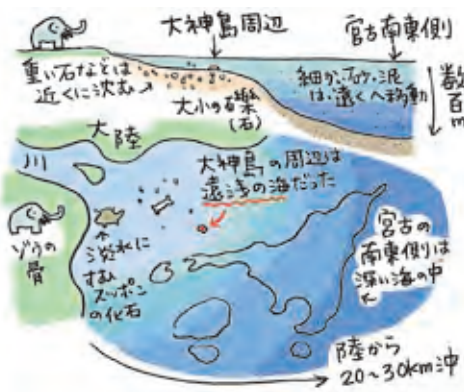


狩俣のウヤーンの様子『みやこの祭祀』(2020)より

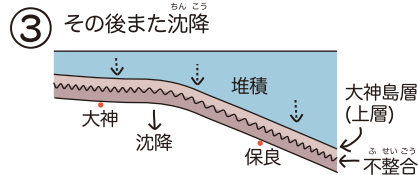
堆積物からわかる島の隆起

おおがみじま、なか、いちばんふる、ち、そうが
 大神島は、宮古の中で一番古い地層が
 観察できる場所です。堆積物や地層の様
 子から、昔は大神島周辺は浅い海底で、
 陸地に近い内湾性の環境だったと考えら
 れています。その証拠に、近くに陸地が
 なければ運ばれてこない淡水産のスポ
 ン化石や大きな礫が発見されています。

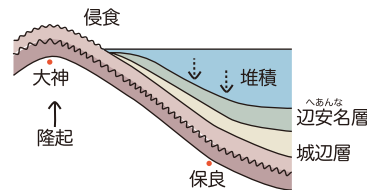
そして、沖から20~30km離れた、水
 深数百mほどの深海に、宮古島の南東側
 があったと考えられています。



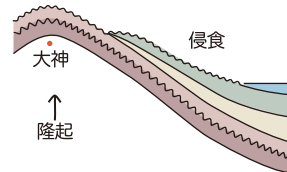
不整合：重なり合うふたつの地層の形成時代が大きく離れていて環境も変わっている状態のこと



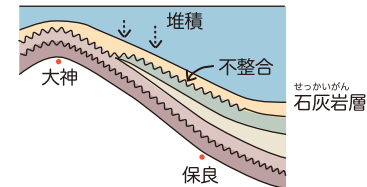
④ 530万年前 大神島周辺のみ隆起



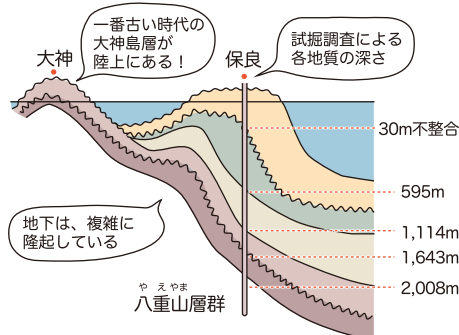
⑤ 239万年前 保良方面まで陸化



⑥ ?万年前 再び全て沈降

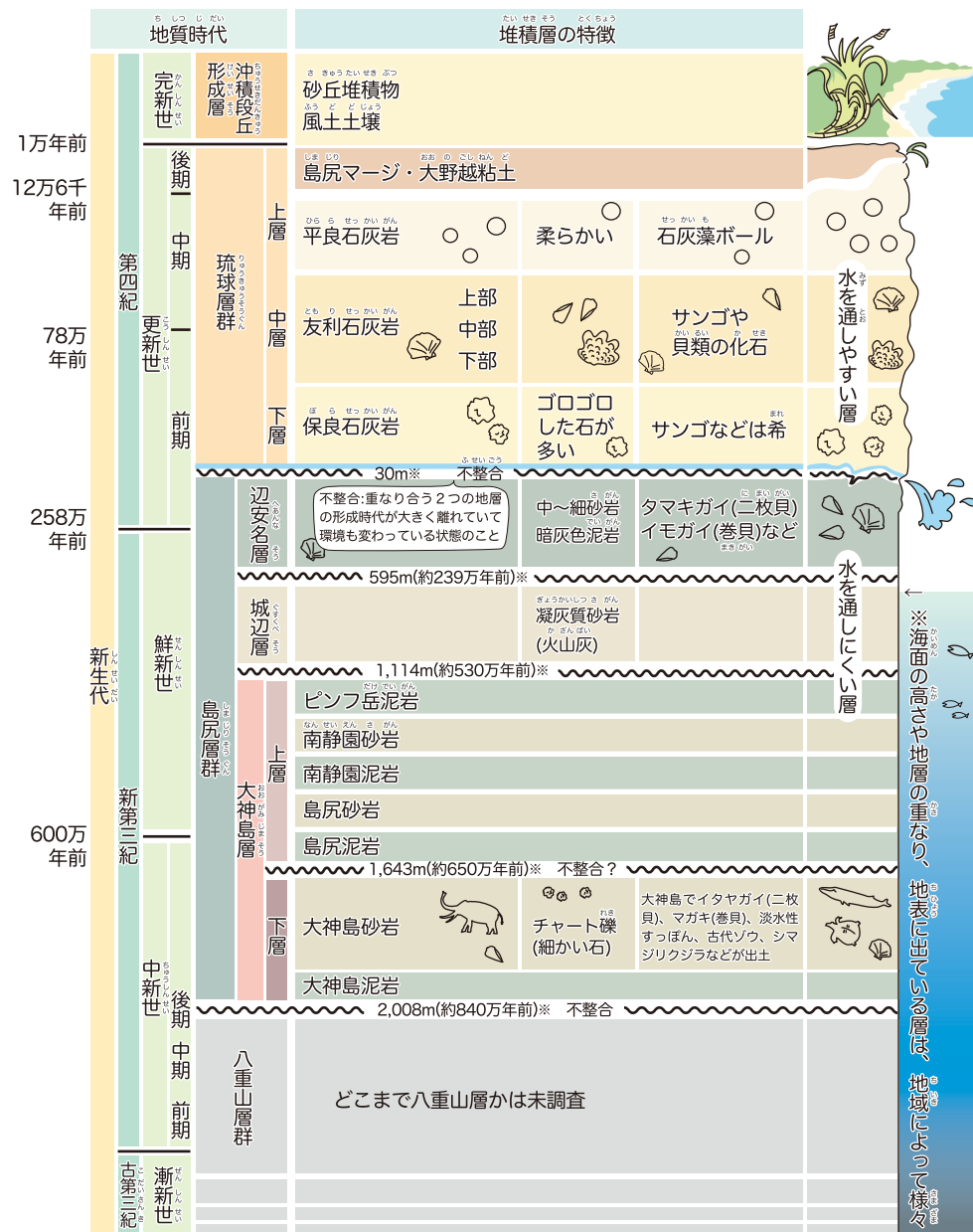


⑦ 現代



※堆積の様子はイメージです

宮古島の一般的な地層 (監修:安谷屋昭氏)



※保良地区(★の場所)で得られた地質の深さと年代

宮古島保良地区「天然ガス資源活用促進に向けた試掘調査事業(宮古R-1抗井, 2014)」, 「沖縄県・宮古島におけるストロンチウム(Sr)同位体年代(加藤進, 2016)」より

さき しま しょ とう ひ ばん むい

先島諸島火番盛 (遠見番所) 池間・狩俣・島尻・大神



池間



狩俣



島尻



大神

先島諸島火番盛は、先島諸島(宮古・八重山)に19か所点在する遠見番所群です。火番盛とは「火を焚く丘」というような意味をもちます。通信手段が発達していない時代の一番速い伝達方法は「烽火」でした。火番盛は船の往来を監視し、烽火によって番所や蔵元を通して琉球王府へ知らせる機能を担っていました。昼夜、遠見番が交替で海上監視にあたっていたと伝えられています。宮古諸島ではこの他に、来間と砂川、多良間(3か所)の遠見番所が国の史跡に指定されています。



1907(明治40)年、「癩予防二関スル件」(法律第11号)が制定され、日本のハンセン病患者の法的な隔離が始まりました。宮古南静園は、1931(昭和6)年ハンセン病療養所「県立宮古保養院」として開院され、収容定員40人に対し15人の入所者から始まりました。

ハンセン病は「伝染する怖い病気」と誤解され、入所者らは想像を絶する差別を受けました。当時は官民挙げてのハンセン病対策だったため、施設の管理体制は厳しく、周囲は有刺鉄線が張られ、収容所と変わらず、患者の人権や自由は全くありませんでした。

戦時中、南静園も壊滅的な被害を受け、管理者は逃亡し、入所者が作った園内の避難壕や食料は日本軍に接収され

ました。そのため、海岸線の自然雑木林で過酷な生活を余儀なくされ、栄養失調やマラリアなどで1年で100名以上の犠牲者が出たといえます。

1996(平成8)年、「らい予防法」がようやく廃止され、およそ90年間にわたり、誤った隔離政策を続けたことを国は認め、謝罪しました。

2016(平成28)年、ハンセン病の歴史と平和の尊さを学び、交流できる場として、園内に「人権啓発交流センター」が開館しました。

